
アキラとゆうこ

星野優子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アキラとゆうつ

【Zコード】

Z0948E

【作者名】

星野優子

【あらすじ】

亡き新妻の面影を映したかのような義弟・裕貴に、失った寂しさや辛さを癒してもらう孝。女性のような気遣いと優しさで孝を思う裕貴にもいつしか大切な人が現れる。大切な人の前で裕貴は本当の自分を探し当てるに・・・。

第一話（前書き）

昨夜のお通夜から降り続いた雨は午後になつて上がり、3月の春の暖かな日差しが高橋家のリビングに注がれてきました。新婚早々の新妻の死はたくさんの弔問客が生前の彼女の親しみやすかつた性格と交友の広さを表していました。

第一話

昨夜のお通夜から降り続いた雨は午後になつて上がり、3月の春の暖かな日差しが高橋家のリビングに注がれてきました。

新婚早々の新妻の死はたくさんの弔問客が生前の彼女の親しみやすかつた性格と交友の広さを表していました。

火葬場から家に戻ると張り詰めていた緊張感が程なく緩み、ソファーにもたれかかるように座り込んでしまった父・雄一は母・葵から差し出された熱いお茶の入った湯呑みに一瞬のやすらぎと、今は亡き娘・美樹を偲ぶゆとりもなかつたこの数日間を振り返つてため息をつきました。

「孝君もこの数日はほとんど寝てないんだろ。今日はついでゆっくりしていきなさい。」

雄一からそう言われた美樹の夫・孝は義父からの気遣いに応え、二階にある独身時代の美樹の部屋をそのまま使つていた義弟・裕貴の部屋で休むことにしました。

結婚して1ヶ月しか経っていないせいか、姉・美樹の使つていた部屋の使用を殆ど変えずに自分の部屋として使つていた裕貴は仲の良い義兄・孝に自分の部屋で休んでもらう為に一緒に二階へと上つていきました。

ピンクや水色など淡い色使いの多い姉の元部屋を裕貴は好んでそのままにしていました。

そんな裕貴の部屋の使い方に孝も何かを感じ、結婚してから何度かその裕貴の部屋へと足を運んでいました。

実の兄弟のように仲の良い孝と裕貴。

部屋に入るとそれまで我慢していた涙を流し始める裕貴を優しく両腕で抱きかかえて自分へと向き直させ、裕貴より10㌢は身長の高い孝は自分の胸に義弟の顔を抱くような形で慰めていました。

柔らかい髪質を肩の辺りまで伸ばしていた裕貴が孝に抱かれて泣いている姿は遠めからみれば、亡くなつた美樹が孝と抱き合つていてかのように見えました。

そして孝自身もその錯覚に戸惑い、その裕貴に対して特別な感情を抱いてしまったのでした。

裕貴は男性にしてはやや小さめの167cmの身長と62kgの細身の体つきで、女性にしては大柄な美樹の体格とそつくりでした。それ故に一人はTシャツやトレーナーなどユニセックスな洋服を着回していたほどに仲がよく、また綺麗な容姿も程よく似ていきました。孝がそんな裕貴と仲良くなるのは必然で、ともすれば男女間によくある考え方の違いが少ない弟の裕貴のほうが一緒に居てラクに感じられるほどでした。

そして、優しくしてくれる義兄の存在は裕貴にとって自分にはない男らしさみたいなものへの憧れでした。

第一話

自分の部屋のベッドでウトウトと眠り始める孝を見守るかのように傍でみていた裕貴はそっと孝の髪の毛を撫で、新妻を失った義兄をいたわるかのように寄り添うように横になっていました。

裕貴もまたこの何日間か疲れなかつたのです。

そして気がつくと裕貴もまた孝と同じく眠ってしまいました。それから何分くらい経つたのでしょうか。裕貴は眠ってしまったことに突然気付いたかのように飛び起きました。

起き上がると眼の前に孝がいました。それもすぐ驚いた顔で。

孝の手には姉が部屋に残していったピンクの口紅がありました。

「僕寝ちゃついていたの・・・あれ！孝さん？それ・・・お姉ちゃんの・・・？」

裕貴がそう言いながら自分の脣に普段とは違つ違和感を抱いていました。

「ごめん。ついつい美樹に似ているなー！って思つて。不謹慎だとは思つたけど、美樹に逢いたくなつて・・・ごめんな。」

裕貴は今自分に起きている事を孝の気持ちを理解した上で、受け止めるようにしようと思いました。そして

「孝さん・・・その・・・もし、気持ち悪いとか思わないのなら・・・。今日だけお姉ちゃんの代わりにこのままお化粧したままでそばにいてあげてもいいよ。・・こんな」と言つちやつていいくのかな？・・・ていうかごめん。変だよね？僕」

と俯きながらも話し始めた裕貴に孝は二コツと笑つて

「オレのことを持つてそんなこと言つてくれるなんて・・・。裕貴・いや、美樹はいい子だな。」

そういうながら美樹になぞらえた裕貴をぎゅっと抱きしめた。

孝に抱かれるような形になつて裕貴はもっと孝の悲しみを取り除いてあげたいと思うようになつていきました。

「あなた？元気出して！」

姉・美樹の真似をして高い声を出して、上目遣いに見つめる裕貴を孝は愛おしく想い、咄嗟にピンクに彩られた裕貴の唇を塞いでしまったのです。

「こんなことお願いしてよかつたのか?」

晴れの日の穂やかな日曜日は、孝が裕貴に対してもいました。

「平気だよ。孝さんの落ち込んだ姿見ているのも辛いし、僕に出来ることつてこれくらいだから・・・」

裕貴は姉の洋服を借りてお化粧をし、姉とそっくりな容姿を生かして孝を励ましてあげようと考えて女装して一日デートをする約束をしていました。

そして、今日日曜日がその日。両親が揃つて外出している隙に、二人は孝の車でドライブに出掛けたのでした。

裕貴の眩いばかりの女性らしさは孝にとって見ていくだけで最高の慰めとなりました。

そればかりか献身的な裕貴の行動や言葉が生前の愛妻・美樹のことと思い起させ、一日の終わりの方には裕貴のことを自然と美樹と呼んでしまつほどでした。

裕貴の方もそんな孝に会わせて恥ずかしくも女言葉で会話をし、亡き姉になりきるよう振る舞うことで孝が笑顔になつていいくことに嬉しさを覚えていました。

でもそれは、義兄が姉のことを愛してくれていることを弟の立場で自然と喜んでいるのとは少し違うものとも感じていました。

尊敬の眼差しでみていた優しい義兄に自分も姉と同じように女として愛されていることに心から歓びを感じていることに気付き始める裕貴は、半面踏み入れてはいけない領域を感じて戸惑うのでした。

「美樹? どうした? 急に元気なくなつて・・・あーごめん。俺が『美樹美樹』って呼んでいたことって嫌だつた?」

「つづん、ちがうの。そんなんじゃなくて・・・ただ、・・・こんなふうにしていいのかな? って想い始めちゃって・・・だつて、私は・・・いえ僕は男なんですから!」

涙が出そうになりながらもそう訴える裕貴は混乱していた。

女として孝にその存在を喜ばれる嬉しさのほうが男なのに女として振舞うことの不安よりも明らかに大きいと感じていたのです。

夕方になり、そろそろ家に帰ろうと孝が言い出した時、裕貴は思わず言ってしまいました。

「お姉ちゃんの代わりでもいいの。ただ、こうして孝さんに笑顔でいてほしい。だから、私少しの間は美樹でいてあげる。もちろん、あなたがそうしてほしいのならだけど・・・」

「美樹・・」

二人はどうやらともなく自然と唇を重ね合わせていました。

前にキスしたときは違う求め合のキス。

裕貴は女として男性を受け入れる初めてのキスを素敵なものと感じていました。

孝の舌が裕貴の舌に絡みついてくる男性的なキスなのに対し、裕貴のキスはそんな孝の舌を受け入れ、吸い、流れに身を任せのような動きをする女性のキスなのでした。

第四話

それから2年後……

「フルルウ・・。フルルウ・・。」

土曜日の朝、孝の家の電話が鳴り響いています。

「もお・・。自分の家の電話でしょ？・・。どうして私が出なくちゃいけないのよ・・！」

普段より少し高い声で電話に出た裕貴は相手の声に少し驚いていました。

「もしもし？ゆうい？來ていたの？もお・・。いつも土曜日の朝は気だるい雰囲気だね・・。昨日の夜はラブラブだったのかな？全くうちの兄貴のどこがいいんだか・・・」

そう言つてからかうように言つてきたのは孝の妹・亜紀でした。亜紀は孝の前では奥さんのように振舞う裕貴の良き理解者で、裕貴のことを見守りながら育てました。

「亜紀つたら、からかわないでお・・・。」

「あれ～？もしかして赤くなっているのかな？そんなに恥ずかしがらないで、もつと堂々と奥さんしていればいいのに！」

と、男の子のようにからかいだす亜紀に対し裕貴は

「そんなんあ・・・。うちの親が理解できない事を知つてゐるくせに・。あ、思い出した！亜紀この前、お母さんの前でゆういーって呼んだでしょ？あの後大変だつたんだからね～」

と、少し語氣を荒げて文句を言いました。

それでも、悪気もみせず亜紀は何事もなかつたかのよつこ
「細かいこと気にするなつて！いいじやん、そんなの。『私はゆうこよー』つて思い切つて言つちやえば・・」

「亜紀のばかつ・・・。」

「アハハ・・・。また、赤くなつてゐるんだあ～。か～わいいね！

ゆうこは。」

二人の会話はどちらが男でどちらが女かわからなくなるものになつていきました。でも、一人の会話が心地よく弾んでいることは他の誰からみても明らかで、裕貴にとつて孝よりももっと気が合う妹の亜紀にはいつもからかわれていても楽しさを感じるのでした。そして、亜紀の前では女でいられることも

「最近顔立ちが優しくなったね？お肌もつるつるだし。」

裕貴はそんなことを彼女のめぐみに言われてドキッとしました。
姉・美樹を亡くし、悲しみにくれている義兄・孝のために、美樹を
装い通い妻の様な生活をするようになつて2年が経ちました。
最初はメイクだけ。それが、美樹の洋服を着るようになり、下着まで着けて、言葉も女言葉で、週末は孝のマンションで妻として孝の
身の回りの世話をして過ごすようになった裕貴も最後の一線だけは
越えないようにしていました。

それも彼女のめぐみの存在があつたからでした。

男としての尊厳みたいなものをわずかに残せていたのかもしれません。

しかし、だんだん受身でいる「ゆづ」としての生活が浸透し始め、
めぐみとの間にも少しギャップが生まれてくるようになつてきました。

そのことをめぐみにつつこまれ、裕貴はつまらない言い訳をします
が、めぐみは追い討ちをかけるかのように何度も鋭い突っ込みを入れてきます。

「そういうえば、日曜日に裕貴のおうちに行くなつて今までなかつたよね？今度行つてもいい？」
と、めぐみが言つてきました。

裕貴が土日に孝との時間を作るためにめぐみとは会わないようにして
いたことに対しても明らかに不審に思つてゐるのがわかります。
(たとえうちに来るとしても実家のほうなら問題ないし、いつも孝
さんと一緒につていうのも傍からみたら変だよね！)

裕貴はそう考へ、簡単にめぐみの誘いをOKしました。

そして、土曜日

「で、彼女が来るから実家に帰るんだ。」このオレには君の身体を拒み続けて・・・。彼女とはしちゃうんだ！」

怒つて自分勝手な言い分でそう言つ孝に裕貴は
「無理言わないで・・・。そもそも、ここまでこうなつちやつたのも
どうかと思っていた矢先のことなんだもん。それに私はあなたとは
結婚できないわけだし・・・。これから自分の人生についても考えな
くちゃいけないし・・・。」

裕貴がそういう終えると、孝は裕貴を後ろから抱きしめ

「最近ゆうこ冷たいよな?またオレを一人にしないでくれよ・・・
といいながら少しだけ膨らみかけている裕貴の胸を揉みながらそつ
言いました。

裕貴は最近女性ホルモンの強い植物性サプリメントを毎日服用していました。

そのせいかAカップくらいに胸は膨らみ始め、めぐみの痛い視線を感じ始めている最近でした。

孝の最後の一言「また・・・」は今回初めて言われた言葉ではなく、「なんとか孝の傍に居てあげなくちゃ・・・」と裕貴にそんな思いに至らせるのでした。

落ち込んでいる孝をなんとかふりきり、実家に向かいながらケータイを取り出す裕貴はいつも通り悩み事を相談するお相手に電話し始めました。

「もしもし?ゆうこ?どした?」

電話に出たのは亜紀でした。

裕貴がこんなとき悩み事を相談できる相手はいつも亜紀でした。
それは女性としてよりも男性の立場からアドバイスしてくれるものでした。

亜紀は裕貴にとつてまさに本当の意味での異性でした。

そして的確なアドバイスに癒され、ますます亜紀に頼り勝ちになつてしまふ裕貴でした。

「そつか～。でも、兄貴のことばかりじゃゆうこもだめになつちやうから、それでよかつたんぢゃない？・・・けどね」「・・・けどなんなの？」

亜紀の前では女言葉になつてしまふ裕貴がその先の言葉を尋ねると「ゆうこにとつて純女の彼女がふさわしいとは思えないな～！なんて思つちゃつたりして・・・。」

「どういう意味？」

更に聞く裕貴に亜紀は

「やつぱりゆうこには男の人人がふさわしいってこと。でも、純男じやゆうこには重いのかもね・・・。」

「・・・どういう意味よお？」

亜紀はそういう裕貴に察してほしそうな顔をして自分の顔を自分の指でさしました。

「亜紀が私の彼氏？！にふさわしい・・・ってこと？」

しばらく間をおいて、裕貴が答えました。

すると、亜紀はにっこり笑つて首を縦に振りました。

なんともさわやかな愛の告白に裕貴もただただ笑つていました。

（亜紀は僕にとつても大切な人。でも、彼女じやなくて彼氏になつてくれるなんて・・・。）

「ゆうこがうじうじしているのなら、私が彼女さんにゆうこのほんとの姿をばらしてもいいんだけどな～！・・・ハハハ[冗談][冗談]

「亜紀のばか・・・」

裕貴はそういうながらも亜紀の自分に対する愛情を真正面が受け止めたいと考えるようになつっていました。

亜紀は裕貴にない男らしい決断力・行動力のようなものを持つていました。また、裕貴は亜紀には足りない女らしさや身を呈して支えてあげる行動を持っていました。

二人が付き合うようになれば、結婚も可能になり、相性もぴったり

の恋人になれるのでしたが、亜紀の実兄の孝とは対立する」といな
つてしまします。

亜紀はそれを避けるべく、本心をわざと隠しながらも裕貴に近づい
ていくのでした。

(おひこを私のお嫁さんにして...)

「これならよろしくでもらえるんじゃないかな~」

日曜日のお昼にデパートの紳士服売り場で、裕貴は自分のではないネクタイを選んでいました。

一人で選ぶことに自信のない裕貴は亜紀を誘い、男性の好みを聞きながら選ぶことにしたのでした。

「私だったらこれを選ぶけど、ネクタイはその人の好みだからね~」
亜紀はそういうて何本か選んで裕貴に見せてきました。

「そうだね。でも、あなたがそういうのならこのうちの一つにするわ。それと、今日一緒に選んでもらったお礼にあなたにもこの中から一つプレゼントしたいんだけど・・・」

「私に? 嬉しいな。ゆうこから初プレゼントだね。ありがとうございます。」
亜紀は嬉しそうにうつむきながら、早速好みの一つを選びました。

孝と裕貴はこのどこのあまり顔を合わせていません。そんな最中に孝の誕生日が来るので、裕貴はプレゼントのネクタイを選びに亜紀とデパートまで来ていたのでした。

買い物をすませ、夜になつてお腹もすいてきました。一人はおしゃれなレストランに入り、食事をすることになりました。

男の子のような格好の亜紀に対し、今日の裕貴はフリミーングなデザインの花柄ワンピースを着ていました。

白地のワンピースの背中越しにブラ線が透けて見えている裕貴に、亜紀は女性としての初々しさを感じていました。

(まだまだ、女性としては生まれたばかりの初心者さんだもんね。キャミを着るようになって教えてあげないと・・・)

大好きなゆうこと男装して初めてのデートをすることになったので、亜紀は嬉しくて嬉しくてたまりません。

当然レストランも綺麗な夜景が見える高いビルにあるものを選び、男性として精一杯裕貴をエスコートしようとしていました。

そんな亜紀の心遣いを肌で感じ、裕貴は亜紀に対しても良い感情を持ち始めている自分に気がついていました。

でも、孝のことがどうしてもひつかかりいつも懶くしゃくしてしまいます。

それは亜紀も同じで、心優しい亜紀は兄・孝のことと裕貴へのストレートな想いにブレーキがかかるのでした。

しかし、今夜は裕貴の素敵な女性としての仕種・言葉遣い・気遣いにいつものブレークがかかりにくくなっていました。そしてこの裕貴をなんとかして自分のものにしたいと思つようになつてくるのでした。

「ねえ？ ゆうこ？ ゆうこは私のこと好き？ 私はゆうこのことを私のお嫁さんにしたいと思っているよ。いきなりこんなこと言つちゃつてごめんね。でも、私・・・ううんオレ今言つておかないとす」「く後悔することになると思って・・・」

綺麗な夜景が亜紀のそんな男言葉を織り交ぜたいきなりのプロポーズを自然なものにしてくれます。

裕貴はすぐ嬉しかったので今すぐにでも亜紀の胸に飛び込みたい思いでした。そして亜紀に向かつてこう言いました。

「ありがとうございます。こんな私でも好きになってくれて・・・でもね、孝さんのこととは今でも心に引っかかっていることなの。あなたもそれは感じていることだと思うけど。ただ、今は孝さん以上にあなたの存在が私の中で大きくなっているみたい。今日はそう確信できました。これからもゆうこのことよろしくお願ひしますね。」

「嬉しいよ。ゆうこ。・・・それこれからオレのことアキラって呼んでくれないかな？」

そういうと、亜紀は周りにたくさんのお客さんがいるのも構わずに夜景を見ている裕貴の頬にキスをしました。

「亜紀・・・アキラ？・・・アキラね！」

チユ・・。裕貴も亜紀の唇に優しくふれるほどキスでお返しをしてあげました。

二人とも周りのことが全く目に入つていません。

当然孝のことも頭から完全に離れ、二人の愛は絶好調に上り詰めていました。

帰り道。亜紀のアパートの前で一人は手をつないでドアを開けました。

何かを決心したかのように。

孝のこと。世間体のこと。裕貴の女装のこと。女としての亜紀のこと。

全てを乗り越えなくてはいけないです。

それでも、一人は一緒になりたい気持ちが強く、部屋のドアを開けてしました。

周りから見たらただの普通のカツプル。

でも、一人は性別逆転のカツプルなのです。

これから幾多の多難が待ち受けています。

それとも上回る一人の愛情は誰にも阻止できないくらい大きなものになっていました。

「ゆうこのこと愛しているから。幸せにするからついてきてくれるよね？」

「うん。アキラにビームでもついていくから。よろしくお願ひします。」

「大好きだよ・・ゆうこ。」 チュ・

「私もアキラのこと大好き。」 チュ・

長い夜が始まります。二人はお互いのことを感じ合い、いろいろなことを乗り越えていく誓いのような儀式に臨むのでした。

最終話（後書き）

初めての作品です。

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0948e/>

アキラとゆうこ

2010年10月9日05時56分発行